

# 念佛に關する一考

小坂井 良 昭

念仏とけ仏を念ずることである事は言ふまでもないのであるが、我が淨土宗に於ては、安樂國なる阿彌陀仏の名号を称するもので有る事、亦衆知の事であらう。然し何故念仏せねばならぬかと、今少し考えて見よう。此の邊には、先づ阿彌陀仏の何たるかを知る必要がある。

阿彌陀仏とは、梵語によれば *amitābha* であり、*amita* であるが、此れは無量光仏、無量壽仏と訳されるものである。無量の老を放ち、無量の壽を有する仏とは、果して如何なる仏であらうか。此處で現實社会に眼を向けて見るに、諸行無常とか万物流転とか云われる如く、すべては移り変つて居る。而るに無量の壽を有する仏とは、永遠不変のものでなければならぬ。此の度駭極まりなき現世に於いて、如何なるものが絶対不変であらうか。若し、無量光・無量壽の仏を現世の尺度より求めるとすれば、それは如何なるものであらうか。此の現世に於いて不変なるもの、それは諸行無常なる事實であり、此れは我々の思考の及ぶ永遠の昔より已<sup>いまだ</sup>来、永久の未來に至る迄、そして世界の至る處で見得る事實であらう。此れは亦眞理若くは眞如と呼ばれるものである。今、一応、之を弥勒——無量光仏・無量壽仏——としよう。次に

その名号を執することは如何なる事か。それは南無と唱える事である事も亦、万人有しく知る處であらう。南無とは梵語で、*Namas* (*namo*) と言う語で帰余と訳されるものである。帰余とは即ち命を投げ出して帰する事であり、之はそのものに頭を低けて頼み頼入する事、そのものに成り切らんとする意である。

此處に於て「南無阿彌陀仏」とは眞理の中に自らの身を帰せしめる事と云う事になる。では何故眞理に帰するのか。此處で亦、眞理と云う事について述べる必要があらう。眞理とは、此の天地森羅万象の、横きすれば大自然の、表化の公理なのである。生余ある者は必ず死し、人間である以上、必ず欲望が有り、必に人は互に争い、又、弱き者は強き者に制せられ、水は高さより低きに流れる。此れが眞理なのである。此處で少しづつ融れて置かねばならぬが、仏には法報化の三身がある。法身とは眞理そのものである。次に報身とは、人間に剣をとつて——法を悪く者が人であるから——人間が眞理に投入し盡し得たる時、完全人格者となる。その相、云わば眞理そのものを人間の本質としたものを云う。次の化身とは、その眞理の種々の表化の姿を言う。例へば風が吹くと云う事は、気圧の高低により生ずるのである事は科学の証明する處であるが、此の科学的な理論を眞理と認識し得るが故に、此の理論を法身とし、化身とは風そのものではなく、目に見得ぬ風を感知しめる處の本々の動搖が化身なのである。然して、人間なるものも、亦自然の一部であり、此の故に自然なる眞理に即応した生活をせねばならぬのであるが、理論を理解し得ても實際には実行し難いのであるが故に、西方に極楽なる世界を置き、その土に沐浴の現を説いて、その仏を拜せよと勧めた力である。然し、死後に淨土を求めなくとも、沐浴の住する場所が安樂の土であれば、現世亦、安樂國である筈であり、過去世も未

来世も亦然り、三世共に安樂國であると言ひ得るのであるが、その事を身近に感じ得ぬが故に、死後に極樂なる國を殊更に望み、淨土國に生せんが爲には、専ら淨土の名号を稱せよと勧めたものである。此処に至つて、淨土の名号を稱すると言う事、淨土の淨土に生せんと願すると言う事は、眞理の名を絶えず口にし、眞理の世中に没入せんとするに他ならない。然して人間である以上、感情・慾望に惑迷し、眞理の生活とは凡そかけ離れた姿になるが故に、絶えず完全人格者である所の淨土の名号を稱し、愈して、眞理に即応した人生を少しでも多く送るべく、心すべし爲に、淨土の名号を誦するのであつて、殊に臨終に至つて、心か転倒するを防がんが爲に死後の安養土を設けて、淨土の名号を稱すれば、定んで安樂國に生ずるとしたものである。然らば、人は死して如何になるのか。人と云ふ事何たるを問はず一切の物は、最後、土に歸するのである。之が眞理である。

以上の如く考えて来ると、念仏とは、人に眞理を知らしめんが爲に、愚者に対しては、眞理の生活をなさしめんが爲にあるものであつて、人に依つて差異こそあれ、悟りへの道に在ける一法であると考えられるのである。

以上、是れ雜文になつたが、平業に當つて、私の念仏觀を述べ、讀者諸賢の御參考に可れは幸甚と存する次第である。

一九五五年二月一日

(結)